

新約聖書 ヨハネによる福音書 14章 23節—29節 (新共同訳)

<sup>23</sup> イエスはこう答えて言われた。「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。わたしの父はその人を愛され、父とわたしとはその人のところに行き、一緒に住む。<sup>24</sup> わたしを愛さない者は、わたしの言葉を守らない。あなたがたが聞いている言葉はわたしのものではなく、わたしをお遣わしになった父のものである。

<sup>25</sup> わたしは、あなたがたといたときに、これらのことを話した。<sup>26</sup> しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。<sup>27</sup> わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。<sup>28</sup> 『わたしは去って行くが、また、あなたがたのところへ戻って来る』と言ったのをあなたがたは聞いた。わたしを愛しているなら、わたしが父のもとに行くのを喜んでくれるはずだ。父はわたしよりも偉大な方だからである。<sup>29</sup> 事が起こったときに、あなたがたが信じるようにと、今、その事の起こる前に話しておく。

※第1朗読と第2朗読は末尾に掲載

### 説教「弁護者」

本日の福音書には、イエスが十字架上で殺される前の晩に弟子たちへ語ったことが記されています。イエスは今、地上を去ろうとしています。しかしそれは決して、弟子たちとの断絶を意味するのではなく、むしろそのことによってこそ両者の愛の交わりが成立するのだとイエスは語ります。

イエスは弟子たちにこう言います。「わたしは、あなたがたといたときに、これらのことを話した。しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる」(ヨハネ 14:25—26)。

「あなたがたといたとき」とは、イエスが地上で弟子たちと歩んだ日々のことです。イエスが地上で人間の肉体をもって弟子たちと共にいたのは、福音書によって記述が異なりますが、3年間もしくは1年間という短い期間でした。

しかしイエスがこの地上を去って神のもとに行ったあと、父なる神によって自分の代わりに聖霊という助け主が遣わされるとイエスは弟子たちに教えます。

その聖霊は、イエス・キリストが肉体をもって地上にいたときのように、期間が限定されたものではなく、いつも私たちと共にいてくださる聖なる霊です。聖霊は、イエス・キリストの代わりに、そしてイエス・キリストの名によって働かれます。

その聖霊が弟子たちに「すべてのことを教え」、イエスが「話したことをことごとく思い起こさせてくださる」とは、どういうことでしょうか（ヨハネ 14:26）。これまで弟子たちは、イエスと共に歩んで来た生活の中で、イエスから様々な教えを聞いてきました。しかし、それがどんなに素晴らしい教えであっても、弟子たちは、本当の意味ではそれらの言葉を理解していませんでした。

イエスが繰り返し嘆いていたように、弟子たちは目があっても見えぬ者たち、耳があっても聞こえぬ者たち、心の鈍い者たちでした（ローマ 11:8）。しかし、イエスがこの地上を去り、弟子たちに聖霊が与えられることによって、初めて弟子たちの心の目は開き、それらの言葉の真意を悟ることができるのです。

イエスの弟子たちを助け、その心を開いた聖霊は、現代に生きる私たちをも導く力です。フランス出身の神学者ジャン・カルヴァンはこう言います。「神は第一に、人間の口を通して外側から私たちの耳に語り、第二に聖霊によって私たちの心に語りかけたもう」。

それは、イエス・キリストが私たちと共に今も生きて働いておられる、ということです。そして聖霊は、今この瞬間も、私たち人間に働きかけ、いつも新しく何をすべきか教えてくれます。イエス・キリストの言葉やわざは過去のものではなく、時代を超えて今を生き続けるものなのです。

イエスは次にこう言いました。「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない」（ヨハネ 14:27）。

キリストが与える平和は、この世が与える平和とは違うということです。この世が与える平和は、多くの場合、気休めに過ぎないでしょう。旧約の偽預言者も平和を語りました。しかし彼らが語る平和は、一時的な気休めに過ぎないと指摘したのが預言者エレミヤです。エレミヤ書 6 章 14 節にこうあります。「彼らは、手軽にわたしの民の傷をいやし、平安がないのに『平安、平安』と言っている」（エレミヤ 6:14 [口語訳]）。

偽預言者は、人々の歓心を買おうとして、当時エルサレムに迫っている危機を率直に示して人々の目を覚まさせることはせず、単なる気休めとして平安、平和を語ったということです。エレミヤには、それが偽預言者の言葉であることが分かっていたのです。

「手軽にわたしの民の傷をいやし」の「手軽に」とは、安易に、表面的に、一時的に、ということです。彼らは、民の傷を表面の浅いところで取り繕うおとします。しかし、本当の傷は別のところに、もっと深いところにあるのです。

その傷の本当の場所と、傷の深さがどのくらいまで達しているかを正しく知ること。その最も根本部分にあるものに目を向けることが、真のいやしと平和に至るために必要不可欠なのです。

心の平安なしに過去をかえりみると、私たちは嘆き後悔し、ああしなければよかった、こうしなければよかったと悔やみがちになります。心の平安なしに将来を思うとき、思いわずらいと取り越し苦労にとらわれます。

イエスが与える平和は、天から与えられる恵みとして、私たちに贈られるものです。その平和は、過去と未来と心の煩い、罪の意識に縛られる私たち人間を解放してくださる真の平和です。

フィリピの信徒への手紙 4 章 7 節に、「人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心と思いとを、キリスト・イエスにあって守るであろう」（口語訳）と記されています。

私たちが自らの力で、私たちの心と思いとを守るのではなくて、神の平安が私たちの心と思いとを守ってくれるということです。その場合に私たちがしなければならないことは、ただその神の平安のうちに留まること、神の平安のうちに自らを委ね、神の平安のうちに生きることです。

日々の中で、心の平安を得ることが難しいのが人間だと思います。いつでも心の平安を感じることもできる人は、ほぼいないでしょう。私たち人間にとって最大の幸せは、心の平安を得ることだと言っても過言ではないかもしれません。

あなたが、あらゆる思い煩いや不安の中であって、心の平安を得たいと感じている時、心の平安は自分自身で作出すものではなく、神の平安のうちに自らを委ねることで与えられるものであることを覚えていてください。

主イエス・キリストは、あなたの心が神の平安に満たされることを望んでいます。

私たちは、どんな試みの中にも、神の平安のうちに留まり、希望と喜びをもって共に歩んで行きましょう。

お祈りをいたします。

天の父なる神様。あなたは聖霊を私たちに送り、あなたのことばによって私たちが平安に生きることができるよう、働きかけてくださいます。思い煩いや、深いところにある傷によって悩む人に、あなたの平安をお与えください。御子主イエス・キリストによって祈ります。

アーメン

\*\*\*\*\* 説教ここまで \*\*\*\*\*

以下、本日に関連する聖書箇所（第1朗読と第2朗読）です。

### 新約聖書 使徒言行録 16章9節—15節（新共同訳）

<sup>9</sup>その夜、パウロは幻を見た。その中で一人のマケドニア人が立って、「マケドニア州に渡って来て、わたしたちを助けてください」と言ってパウロに願った。<sup>10</sup>パウロがこの幻を見たとき、わたしたちはすぐにマケドニアへ向けて出発することにした。マケドニア人に福音を告げ知らせるために、神がわたしたちを召されているのだと、確信するに至ったからである。

<sup>11</sup>わたしたちはトロアスから船出してサモトラケ島に直航し、翌日ネアポリスの港に着き、<sup>12</sup>そこから、マケドニア州第一区の都市で、ローマの植民都市であるフィリピに行った。そして、この町に数日間滞在した。<sup>13</sup>安息日に町の門を出て、祈りの場所があると思われる川岸に行った。そして、わたしたちもそこに座って、集まっていた婦人たちに話をした。<sup>14</sup>ティアティア市出身の紫布を商う人で、神をあがめるリディアという婦人も話を聞いていたが、主が彼女の心を開かれたので、彼女はパウロの話に注意深く聞いた。<sup>15</sup>そして、彼女も家族の者も洗礼を受けたが、そのとき、「私が主を信じる者だと思いでしたら、どうぞ、私の家に来てお泊まりください」と言ってわたしたちを招待し、無理に承知させた。

### 新約聖書 ヨハネの黙示録 21章22節—22章5節（新共同訳）

<sup>22</sup>わたしは、都の中に神殿を見なかった。全能者である神、主と小羊とが都の神殿だからである。<sup>23</sup>この都には、それを照らす太陽も月も、必要でない。神の栄光が都を照らしており、小羊が都の明かりだからである。<sup>24</sup>諸国の民は、都の光の中を歩き、地上の王たちは、自分たちの栄光を携えて、都に来る。<sup>25</sup>都の門は、一日中決して閉ざされない。そこには夜がないからである。<sup>26</sup>人々は、諸国の民の栄光と誉れとを携えて都に来る。<sup>27</sup>しかし、汚れた者、忌まわしいことと偽りを行う者はだれ一人、決して都に入れない。小羊の命の書に名が書いてある者だけが入れる。

<sup>22:1</sup>天使はまた、神と小羊の玉座から流れ出て、水晶のように輝く命の水の川をわたしに見せた。<sup>2</sup>川は、都の大通りの中央を流れ、その両岸には命の木があって、年に十二回実を結び、毎月実をみのらせる。そして、その木の葉は諸国の民の病を治す。<sup>3</sup>もはや、呪われるものは何一つない。神と小羊の玉座が都にあって、神の僕たちは神を礼拝し、<sup>4</sup>御顔を仰ぎ見る。彼らの額には、神の名が記されている。<sup>5</sup>もはや、夜はなく、ともし火の光も太陽の光も要らない。神である主が僕たちを照らし、彼らは世々限りなく統治するからである。

教会讃美歌 328番「主イエスにしたがう」、357番「主なる神を」、250番「つくられしものよ」、416番「わがゆくみち」。